

「信仰の弱い人を受け入れなさい」

2018年10月26日

ローマの信徒への手紙 14章1節～6節 信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。

パウロは、「信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません」と書いている。信仰の強い人は、福音をよく受け止め、自分を大事にし、隣人も大事にする人であろう。信仰の弱い人は、福音の核心をまだ捉えられず、信仰の確信を十分に得ることができずに、隣人への関心も薄い人であろう。世の中では、強い人が弱い人を差別、抑圧し、問題を起こすケースが多い。それは、犯罪とまではいかなくとも、社会に荒廃、虚無をもたらして行くのである。パウロは、このような視点から「食事問題」を論じている。

「何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。」強い人は何を食べてもよいと信じて食べているが、野菜だけを食べている弱い人がいる。この両者の間で、軽蔑と裁き合いが起こっている。食べ物問題は、コリント教会で起こった「偶像に供えられた肉」に典型的に表れている。コリントには壮大なアフロディーテ神殿があり、民衆は肉を供え、その肉を食べた。偶像に供えた肉を食べていいのか、悪いのかという議論が教会で起こった。福音の自由の知識を持つ強い人は、供えられた肉も、肉に過ぎないから食べてもよいと言い、肉を食べることに躊躇する弱い人を軽蔑した。パウロは、「あなたの知識によって、弱い人が亡びてしまいます。その兄弟のためにもキリストは死んでくださったのです（Iコリント8:11）」と言う。そこから「兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません（Iコリント8:13）」と書いている。強い人とはこのことで、ただ、敬服する。パウロは、この問題を、当時の社会の事例から説明している。他人の召し使いを裁くことはできない。「召し使が立つのも倒れるのも、その主人によるのです。」と。そのように、神の者である人を他人が裁いてはならない、立たせることができる神がその人を立たせてくださるからである。

ある日を特定の日として他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいる。各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきである。特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。また、食べない人も、主のために食べない。そして、共に神に感謝するのである。福音の自由は知識を持って誇り、裁くことではない。弱い者のためにも、キリストが死んでくださった。その兄弟を愛することが真の福音である。